市民と博物館 152 2024.9.30
日立市郷土博物館

1590年（天正18）4月22日
紙本墨書・一幅
32.6×39.4cm

資料紹介　伊達政宗書状

関家に伝来した伊達政宗（1567～1636）の書状である。「政宗」の署名と花押（サイン）が据えられている。政宗は公私の花押を使い分けるとともに、頻繁に花押の形を変えており、その種類は約70年の生涯で40種以上になる。一般に、「鶺鴒（セキレイ）をデザイン化した」と言われる政宗の花押は公用である。知行宛行や起請文など永続的な効力が求められる文書や家臣以外の人物に出す文書に用いられ、約15種前後が確認されており形式はほぼ一定している。一方、家臣や身内に対する文書には私用の花押が据えられ、その形式はバラエティーに富み、約30種が確認される。

政宗は多種の花押を使っているが、新旧の形状を混用していないので、花押を年代順に配列することが可能である。この書状には「卯月（4月）廿二日」とあるのみで年号が記されていないが、政宗が天正17年から18年ごろ、私用に用いた花押が据えられている。

この書状は、関窓斉の書状に対する政宗の返信である。書状には「那須より手切の様躰は紙面に顕われ候、尤も無念、此の事に候」とあり、政宗が無念ではあるが下野の那須氏と手切（敵対関係）となったことが記されている。また「近日、上洛の事に候」とあるのは小田原の北条氏を攻める豊臣秀吉のもとへの参陣を意味すると考えられるので、この書状は天正18年に発給されたと推定できる。奥州の伊達氏と常陸の佐竹氏、両雄の複雑微妙かつ緊迫した政治状況を伝える貴重な史料である。

さて、この書状の伝来の経緯は不明である。また、宛所である「関窓斎」についても未詳とされているが、奥州の戦国大名白川義親の重臣と考えられる。もともと関氏の出自は、所蔵の系図等にも奥州白川と記されている。戦国期、白川氏および八槻修験の勢力は常陸国小里郷（現在の日立市東河内町以北から旧里美村の地域）にも及んでいたことを視野に入れて検討する必要がある。天正18年8月8日付け白川義親宛て「伊達政宗書状写」（「伊達治家記録引証記」）に「闇寒斎」なる人物がみえるが「関窓斎」の誤りではなかろうか。

水戸第9代藩主徳川斉昭は、日立地方巡検で関家に宿泊した際に所蔵史料の閲覧を求め、さらに、中世文書や系図を預かり、青山延于（彰考館総裁、弘道館教授頭取などを歴任）に命じて内容を吟味、表装をさせて関家に返却している。この書状はその中の1点で、楮紙の表面が茶色味がかっているのは塗布された柿渋によるもので、表装の際に防水・防虫・防腐のための保存処置として施されたものであろう。

（宮内教男）

高潔な政治家・大津淳一郎と佳人の奇遇

池貝 正

大正から昭和初期の政党である憲政会や立憲民政党（以下、民政党と略す）について調べていくうちに、御当地出身の大津淳一郎（号は鈴山）に興味を持ちました。幾度か郷土博物館を訪問し、大津に関する資料を閲覧させていただきました。

大津淳一郎は自由民権運動で活躍し、国政に進出してからは憲政会などに所属して中央政界で活躍しました。大著『大日本憲政史』（全10巻）を残したことも業績の一つです。号の鈴山は、高鈴山からとったもので、大津の代名詞であり、後援会も鈴山会という名称でした。生誕の地である折笠には養高園と呼ばれた立派な記念館があったそうです。現在、大津の活躍を偲ぶものとして、豊浦小学校にある銅像（養高園から移したもの）と顕彰碑が残されています。

前田香径著『明治大正の水戸を行く』には、水戸駅前で旅館を経営していた女性経営者の話が載っています。「常連は当時の憲政会の政客でした大津鈴山先生はいつもくたびれた羊かん色の紋付を着ていましたが、正直でむら気がなく一厘の借金もしませんでした」とその人柄が語られています。

大津は、総選挙で2度の落選を経験しました。1度目は第2回総選挙で政府による激しい選挙干渉によるものでした。2度目の落選後の様子は、当時東京の大津宅に下宿した甥の大津一郎氏が「日ごろ清廉潔白で何一つ事業に手を出さない位だったため、すぐ生活に困り、私が叔父の使いで質屋のノレンをくぐったことがあった」と朝日新聞の記事の中で語っています。

『郷土史にかがやく人びと』には、民権運動の同志でありながら袂を分かった野口勝一との話が載っています。第2回の総選挙で敗れた因縁の相手でもあった野口が衆議院議員を引退するという話を聞くと、急いで駆け付けて年来の友人として慰留したとあります。

また郷里に帰れば誰彼のへだてなく交わり、墓参は欠かさずに「父母の墓の前では手をついて真心をこめてもうでるという風だった」と前出の一郎氏は語っています。大津は議会政治に精力を傾けた情熱の人でしたが、その一方で故郷での縁を大切にし、高潔な政治家でもありました。

民政党の機関紙『民政』に「大津さんと佳人の奇遇」という題名で大津が語った興味深い逸話が載っています。

関ヶ原の戦いの後、秋田に国替となった佐竹家に付き従った大津の一門の人々がいました。大津は秋田に遊説で行った折、この地に移住した大津一門の人たちの消息をいろいろな人に尋ねまわったそうです。しかし何も消息がわからないまま演説会の後の懇親会に参加しました。

懇親会の席でも、大津は「佐竹家に大津姓を名乗つて居る人は無かつたかね」と聞くと、お酌をしていた芸者さんが大津の前へ来て顔をじっと見詰めて「あなたは大津さんで御座いますね」といいました。「わしが大津淳一郎だ。実は私の一門が此地に分かれて居る筈なんだ、多分殿様に附いて来たのだからこの秋田に来た方が本家だと思ふ、それでその消息を知りたいと思ふ」というと、その芸者さんは「私の家は元佐竹様の御家来で、大津つて云ふんで御座いますの」という話になったそうです。

それを聞いていた同じ民政党の町田忠治が「本家の御令嬢の前で席が高いよ、君は下つて令嬢を床の間の前へ座らせ給へ」と騒ぎ立て、本家の御令嬢との思わぬ出会いで宴席は盛り上がったといいます。

大津は政界の長老であり、政党政治家として一目置かれ、憲政会内閣になれば大津が文部大臣という新聞の予想もありました。しかし、憲政会の主流派とは距離があり、大臣になることはありませんでした。瀬谷義彦著『ひたち史余話』には、親族の間で「英語ができれば、大臣になれたのに」と噂していたという話が載っています。大津が憲政会の主流派と距離があったので、ポストに恵まれなかったというのが真相であると推測されます。

しかし、最晩年には、貴族院議員に勅選されるという明治憲法下では最も名誉な地位をえました。葬儀では、彼が校長をしていた音楽学校の学生たちによって政治家としては珍しく音楽葬で送られました。

（いけがい ただし　茨城県立古河中等教育学校教諭）

豊浦小学校にある大津淳一郎の銅像と顕彰碑